

---

# アリアドネの犯行

千葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アリアドネの犯行

### 【Nコード】

N6236U

### 【作者名】

千葉

### 【あらすじ】

夜は危険がいっぱいです

それは非常に明るい夜のことでした。月は半月より少し太った程度にしか満ちていなかったのですが、雲一つ無い空は、その闇をしかと眼に留められる程澄んでいたのです。

時刻は深夜1時。私はどうも寝付くことが出来ず、こんな夜中に部屋を抜け出して外へと出ました。晩秋の空気はひやりと冷たくて、薄い上着を掛けただけの私の肌をちくちくと刺したのです。私はどこへ行く当ても無いまま、とぼとぼと下宿の周りを散歩して、遠くを走る車の音に耳を済ましてみたり、電灯が誰の為でもなくただ煌々と照っているのを眺めたりしていました。

私は途中、暗い道路の端に自動販売機を見付けました。そこで温かいコーヒーを買うことにして、上着のポケットから数枚の小銭を取りだし、機械の口に押し込みました。無機質な音を立ててそれらは空洞の中に飲みこまれていきます。それに呼応するように、整然と並んだ黒いボタンの上に細い明りが点りました。私は幾つか並んだ缶コーヒーのサンプルを眺め、無糖にすべきか加糖にすべきか、はたまたミルクの有無はどうするかと考えを巡らせました。そうしてやはり無糖に決めて、右の人差し指をボタンへと向けたとき、背後からすつと伸びて来るものがあつたのです。ハッとして振り向くと、黒いコートを纏った色の白い女が、私の頭越しに電光を見つめているのです。そして伸ばされた彼女の指先が、私の顔の横をすり抜けて今しもボタンを押そうとしているのです。私は彼女がこんなにも私のそばへ近寄っていることなど全く気付きませんでした。私が呆然と彼女の顔を見つめっていると、頭の後ろでピツと軽快な音がしました。彼女が自販機のボタンを押したのです。視線を機械の方へ戻すと、丁度がたごとと音を立てて缶が機械の中から滑り落

ちてくるところでした。女はいつの間にか私の横に並んでいて、相変わらず私のことなどそこに存在していないかのように、こちらへ見向きもしないままゆっくりとした動作で膝を折り、缶の取りだし口へ手を伸ばしました。白い手がプラスチックの覆いを潜り、やがて小さな缶を包んで帰って来ました。その手に握られていたのは、砂糖とミルクの入った甘いコーヒーでした。彼女は立ちあがると、両の手で温かい缶を包みながら一つ、息を吐きだしました。そうして、その大きな瞳をすっとこちらへ向けたのです。それが、彼女が私のことをしかと意識した、最初で最後の瞬間でした。

「次、会った時、返すから。」

彼女は纏ったコートと同じ真つ黒な瞳で私の眼をじっと見つめながら、薄い唇を小さく動かしてそれだけ言いました。そうしてすぐに私の横をすり抜けて、深夜1時過ぎの闇の中へとその身を紛れ込ませてしまいました。私はただぼんやりと彼女の去った方向を見つめながら、小さく唸る自動販売機の前に立ちつくし、120円の缶コーヒーの行方を想っていたのでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6236u/>

---

アリアドネの犯行

2011年10月7日23時32分発行